
とある転生者の過負荷（マイナス）

クズ

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

とある転生者の過^{マイナス}負荷

【Nコード】

N1468Y

【作者名】

クズ

【あらすじ】

一瞬にして死人になった僕。気が付けばそこは死後の世界。そこで僕は、下っ端の死後の世界の管理人みたいなのに会った。ポイントが皆無な僕は天国にも地獄にも行けず、人生をやり直す必要がある。所謂転生だ。下っ端に気に入られた僕は大量チート能力が貰うことが出来るらしい。

・・・
くだらねえ

大量チートなんか要らない

そんなの、過負荷一つで十分だよ

悪いことも良いことも、僕がぜーんぶ『無かったこと』にするから

プロローグ（前書き）

悔いはありません

初投稿にして始めてしまいました

駄目文ですが、どうぞ

プロローグ

人生とは唐突にことが起きるんですね。

突然ですが、僕は死にました。え、いきなりすぎる？ それなら僕を木っ端微塵に爆死させた工事用ダイナマイトに文句を言うってください。

アレは普通の日でした。僕はいつも通り日課の朝の散歩に出掛けました。

外も良い天気で、小鳥などが鳴いており、とても平和な日でした。

僕も

機嫌が上々、まさに最高の朝でした。

僕の家の近くには新しくビルが建設されることになって、どのような建物になるのかワクワクしていました。

それなのに・・・

アレは一瞬の出来事でした。

いつも通りビルの前を通ります。それは別になにもおかしくありません。

いつも通りちよつとだけビルを眺めます。それも別になにもおかしくありません。

いつも通りその高い頂上まで視線を泳がせました。それも別になにもおかしくありません。

すると、いつも通りじゃない物が上空に見えました。普通より一回り大きい小石の

ように、徐々に迫ってくるのが見えました。危ないなあ、と思い、普通に右へ避けました。

次の瞬間、僕の意識は無くなりました。

最後に感じたのは、とてつもない浮遊感です。

で、気が付けば真っ白な世界に居るわけですよ。上も真っ白、地面も真っ白、

壁の存在さえ疑わしいぐらい真っ白でした。汚れも一つとついておらず、まさに

純白の景色でした。普通の人なら見惚れているところですが、生憎と僕はその様な感情はないのですよ。

ちなみにここが話の没頭部分です。

今は状況を整理しようと、さっきまでの記憶を考え直してただけです。

ホント、どこなんでしょうね。

「ギャハハハハハ！！」

すると、突然下品で狂気に満ちた笑い声が聞こえました。

こんな笑い方、今だにする人が居るんですか？

その笑い声は徐々に大きくなっていき、やがては一人の人物がこちらに近づいてきました。

「ギャハハハハハ！！！！ お前、最高だよ！」

その人物は、ジーンズにTシャツという今時の若い人が着てそうな服装で、
髪は真っ赤で血の色のようにでした。靴は履いておらず、裸足のままです。

「いきなり登場して第一声が”ギャハハハハ”はどうかと思いますよ？」

的確な突っ込み。なのに赤髪あかがみ(仮)さんは大笑いしたままです。

「ハハハハ！！ いやだって、あんな死に様だと誰でも笑うだろう！
ギャハハハハ！」

死に様？ ああ、あれのことですか。

「ギャハハハ！ ああ、悪い。つい面白くてな・・・ククク。
はあ、これ毎回説明すんのも面倒だけど、お前は死人だ」

そんなの明白ですよ。貴方は二次小説などを読んだことがあるんですか？

大抵の場合は死んで真っ白な世界に行く↓神様に会うというパターンです。

「そんなの分かってますよ」

「へえ、状況把握が早いな。さては相当な妄想癖があるな？」

「馬鹿なこと言ってないで、早く僕を天国でも地獄にでも送ってくださいよ」

僕はもう楽になりたいんですよ。さっさと天国でも地獄でも何でもいいから送って欲しいです。

「まあ待て待て。こっちにも”ステップ” ってのがあるんだよ。まずは・・・ククク、死因からだな」

さっきからなんで死因で大爆笑してるんですか？　なんというか、死に様で笑われると気分が悪くなります。

「お前の死因は・・・ギャハハハハ！！　工事用爆発物投下による爆死だってよ！

ギャハハハハハ！！　それって避ける意味がねえじゃねえか！！」

いい加減にしないと怒りますよ？　僕だって気は長くありません。

「お前の人生経験を調べさせてもらったけどさ、お前、親父が工事現場で爆発物を取り扱う仕事してんだろ？　それなのに爆弾で死ぬって・・・気の毒すぎるだろギャハハハハ！！！！」

そこまで笑われるって・・・

「まあ、話は終わりだ。とつと天国にでも行きな」

あれ？　それで終わり？　こういう展開って”神のミスでした、転生させます”って展開なんじゃないんですか？

「こういう場合って”神のミスでした。お詫びとして転生させます”って展開なんじゃないんですか？」

「はあ？　なに言ってるのてめえ？　神がミスするわけねえってことぐらい下っ端のオレでも分かるわ！　なんでもかんでも神のせいにするんじゃないねえ、この無神論者が！」

この人は下っ端なんですか・・・想像していたのとかなり違いますね。

ま、仕方ないですね。さっさと天国で安らかに暮らしましょう。

「ん、ちよつと待て」

すると、赤髪さんはポケットからなにやらノートのような物を取り出しました。

かなり使い込まれてますが、なにが書いてあるんでしょうか・・・

「プ、ギャハハハハ！！！」

ノートを見ると再び大笑いをし始めました。さっきから笑ってばかりですね。

「お前最高だよ！ うん、実に面白い！」

なにが気に入られたんでしょうか・・・僕はまだ貴方とは初対面ですよ？

「いいか、あの世つつーか死んだ後の世界にはポイントってのがあるんだ」

ポイント？

「ポイント・・・ですか」

「ああ。生まれた時から死ぬ時まで人間は皆ポイントを持って生活してるんだ。

悪いことをすればポイントは無くなるし、逆に良いことをすればポイントが増える。

そして、死んだ後に行く場所がそのポイントによって決まるんだ」

なんというか、ゲームみたいですわね。僕はどれぐらいあるんでしょうか。

「それがお前と来たら・・・ギャハハハハハ！！」

いい加減笑い声が鬱陶しくなってきました。何回も聞いていると耳障りです。

「僕のポイントになにかおかしい点でも？」

「いや、まったく無いんだよ。でも、逆にそれが面白いんだよ！
ギャハハハ！」

普通のなにがいけないんでしょうか？ 自惚れているわけではないですけど

僕は人生でなにも悪いことはしてませんよ？

「普通のなにがいけないんですか？」

「いや、だって、お前のポイントは生まれた時から一切変わってないんだよ！

つまり、生まれてから一度も良いことも悪いこともしてねえんだよ！
それって

ある意味不可能じゃね？ ギャハハハハハ！」

言われてみれば、僕の人生ではあまり良いことも悪いことも起きてませんね。

普通に生まれて、普通に生活して、普通に生きていましたからね。

親戚や親が亡くなられたりした時でも泣いた覚えはないですし、ただ寿命が僕より早く訪れたとしか思いませんでした。それはある意味

大罪だと思いますけど。

「そしたら僕はどうなるんですか？」

「それが分からねえんだよ．．．これって今まで始めてのことだし、

オレも対応の仕方が分かんねえんだよ。ちょっと待ってろ、今調べとくから」

すると、赤髪さんはポケットから小さいながらも分厚い本を取り出し、

ペラペラとページを捲り始めました。

「えーと．．．あったあった、”死人の扱い書”」

僕はゲーム機ですか。

「．．．おいおい、マジかよ．．．」

赤髪さんはなにやら驚いた表情になりました。

どうかしたんでしょうか？

「えーと．．．いいか、さっきも言ったと思うがお前のポイントは生まれた時

からまったく変わってない。つまり0のままなんだ。大抵の奴はポイントが0より

多かった時は天国で、0より低かったら地獄に行くんだ。でもお前はポイントが0

のまま。どちら向きでもないからどちら側にも送れない」

うんうん、つまり？

「つまり．．．お前は一から人生をやり直す必要がある」

．．．はい？

人生を一からやり直す？　なに刑事ドラマの主人公が犯人に言うセリフ
みたいなことを言ってるんですか？

「どういう意味ですか？」

「お前はそのままもう一度生を受けることになる。その年齢のまま、
その状態のまま再び生き返る。所謂転生だ」

へえ、もう一度僕は生きれるんですか。周りにまったく干渉だったのが
この後に及んで役立ちましたね。

「ただ、この場合は幾つか条件がある」

条件？

「取り扱い説明書での条件は三つ。

生き返る世界はランダムに指定される。元々の世界かもしれないし、過去の世界かもしれないし、まったくの別世界かもしれない。

生き返った後はなんとしてでも寿命で死ななければならない。
もし事故や殺人で死んだ場合、お前はそのままずっと生死の狭間を
永久に
さ迷うことになる。

死んだ後のポイントで今後が決まる。

さっきも話したがお前のポイントは0のままだ。つまり、良く生きれば天国で過ごせるし、悪く生きれば地獄で過ごすことになる。

再び0のままだと？と同じく生死の狭間に突き落とされる。

以上だ。分かったか？」

うーん、中々と厳しい内容ですね。気をつけないと天国か地獄に簡単に傾くような点数ですしね。

「分かりました」

「そしてだ、これは久しぶりに爆笑させてくれたお前への礼だ。よくある大量チートってのをやるよ。何個でもいいから好きに選べ」

ああ、あのテンプレートの的な展開ね

うん、でも僕の考えはもう纏まっているよ

「そんなのいないよ」

「は？」

「僕に大量チートなんてそんな面倒なもの是要らない。

いや、” 必要ない” と言った方が正しいかな」

「必要ないだア？ てめえ、おれ本気で言ってるのか？

お前も健康な高校生男子なら大量チートぐれェ欲しいだろ？」

ううん、全然

僕が欲しいのは”アノ”能力一つだけだよ

「僕が欲しいのはとある一つの能力だ」

「ほオ、それはなんだ、言ってみろ」

間を入れて、僕は笑顔で能力名を言う

「大嘘憑き^{オールフイクシヨン}。それがその過負荷^{マイナス}の名前だ」

「おーるふいくしょん？」

なんだ、知らないのか？

週間少年ジャンプの愛読者なら多分有名なチート能力なのに

「大嘘憑^{オールフイクシヨン}きの能力は、『現実^{すべて}を虚構^{なかったこと}にする』。人類史上最低の過負^{マイ}荷^{ナス}です」

「現実を虚構にする？ おいおい、どんなチート能力だよそれ？

大量チートは要らねえって言った癖によオ。それに、さつきから言
つてる

過負荷^{マイナス}ってなんだよ？ 聞いたこともねえぞ」

「過負荷っていうのは、人間が稀に生まれながらに持っている才能^{のうりよく}
の呼び名です。自分にとって利益^{プラス}になるのが異常、自分にとって不
利益^{マイナス}

になるのが過負荷^{マイナス}って呼ばれています」

僕が過負荷について説明すると、赤髪さんは「なるほど」と手を叩いて頷く

「そして、過負荷を持った人間は生まれるがらの敗者で、不幸にしかならないような人類の屑です。僕にピッタリでしょう？」

過負荷は一見便利そうに見えて実はそうでもない

一度でも過負荷になれば一生幸せになれない、無才能で負けることしか出来ないような人間になってしまうんだ

ま、僕にはそんな関係ないけどね

「・・・ギャハハハハハ！！！！ 最高だよ！ お前、本当に面白え！

まさか自分の貰う能力が自分を不利にする能力なんて、傑作だ！ うん、気に入ったぜお前！ 分かった、お前にその大嘘憑きとやらをやるよ」

赤髪さんは僕の胸の辺りに手を置いて、目を閉じなにかを唱え始めた

すると、体の中に突然なにかが送り込まれるような感触に陥る

その感触が終わると、僕は自分に騒然とした

自己憎悪、劣等感、世界のくだらなさ

自分は最低だ、無才能だ、負完全だ

これが大嘘憑マイナスきの力、なのか・・・

「終わりだ。ついでに一つだけ能力を追加させてもらったぜ。なあに、くだらねえチート能力じゃねえよ。その能力の元々の所持者が使っていた能力だ」

大嘘憑きの元々の所持者が使っていた能力？

それってもしかして・・・

「『却本ブックメーカー作り』」

「お？ 知ってるのか？」

知ってるもなにも、それこそ

大嘘憑き以上に最低の過負荷じゃないか

「『ありがとう赤髪さん』 『これで僕は負完全かんぜんになれた』」

「喋り方が違わくないか？」

過負荷というか却本作りの所為だよ

あの過負荷の効果を受けている人は皆こんな喋り方と思うよ？

「そういえばお前、名前はどいうするんだ？」

名前、か・・・

話に夢中になり過ぎて考えてなかったな

「『前世と同じじゃ駄目なんですか?』」

「悪いがそりゃ駄目だ。他を選びな」

でも、過負荷として生きるのなら、
それに相応しい名前が必要だ

しかも、『大嘘憑き』と『却本作り』を持っているんだ

となると名乗る名前は一つしかないだろう

「『球磨川』」

「ん?」

「『球磨川^{くまがわ}』 『そう名乗るよ』」

「オツケー。じゃあ名前は?」

流石に同姓同名は嫌だな

だって、それだと『僕』という過負荷^{こじん}じゃなくなるだろう?

”球磨川禊”に取り込まれて”僕”という存在が無くってしまう

「『うーん・・・』 『じゃあ雪^{ゆき}で』 『流石に同姓同名は嫌だから、
限りなく近い名前を選ばせて貰ったよ』」

「球磨川雪ねえ。くまがわ せうせき うん、良いんじゃないの？」

決定、だね

「『ところで何時転生するんだい？』」

「今だ」

すると、赤髪さんは間を入れることなく僕を蹴りました。

いきなり不意を突かれたので必然的に僕の体は倒れる。

でも、地面に落ちるはずの背中が突然浮遊感を感じました。

下を見ると、そこには大きな穴。中は暗闇しか広がっていません。

「『せめて合図ぐらいくださいよ．．．』」

ちょっとした愚痴を零し、穴の中へと落ちていく。

「頑張れよー！ー！！」

最後に赤髪さんの声援が聞こえました。

さて、僕は一体どこの世界に送られるんでしょうか．．．出来れば元の世界がいいんですけど、そう都合良く事は運びませんしね。

ああ、ノンビリとした世界に行きたい．．．

まあ、どんな世界でも良いけどね

どんなことが起きても、僕がゼーんぶ『無かったこと』にするから

プロローグ（後書き）

とても長いプロローグでした

過負荷が好きで始めた小説です

どうぞよろしくお願いします

一話 『んじゃ』 『また明日とか!』 (前書き)

駄・目・文

自分の駄目文さに本当に呆れます

ああ、誰か文才を分けてください

初めて感想をくださった方、評価してくださった方々、
ありがとうございます

一話 『んじゃ』 『また明日とか!』

気が付けば僕は、遙か上空へ聳える建物の裏に倒れていた

体中に鈍い痛みが走っていて、頭痛も少々ある

僕は…生まれ変わったのか…

あまり実感が湧かないな

でも、事実僕は死んで、再び生き返った

こんな週間少年ジャンプに出てきそうな展開、
実際にあるんだね

「『痛たたた…ここは何処だろう?』」

死から開放感から思わず独り言を呟いてしまう

さて、僕の新しく来た世界はどうなんだろう

立ち上がり、辺りを見回してみる

幾つも聳える高層ビルと、隅で道を掃除するロボットのようなもの

そして、僕の世界では見当たらなかった電車などが幾つか見える

この世界はどうやら僕の元の世界と似ているらしい

少々技術だけ進んでいるみたいだけど

「おーい、その君！」

路地裏から観察していると、建物の影から突然声を掛けられた

そちらの方向を向いていると、一人の学生らしき少年が居た

学生服を着ていて、腕には緑色の腕章をしている

誰だろう？

「『ん？ 僕？』」

「ッ…！」

僕もそう少年に言うのと、あの子は一瞬怯えたように見えた。

その表情は恐怖から軽蔑と憎しみの目に瞬く間に変わった

僕が他人と会話するだけで恐れられ、嫌われる…か

これが過負荷の欠点みりよくなのか…

「この辺りで大きなエネルギー反応があったと
通報があったんだけど…君はなにか知っているのか？」

丁寧な口調でも表情はかなり警戒している

大きなエネルギー反応ね…

完全に僕じゃないか

「『うーん…』 『知らない』 『少なくとも僕は無関係だね』」

「とりあえず一緒に来てもらっていいか？ 見かけない顔だし、少し話を聞かせてくれないかな…！」

そう言って作り笑いで僕に手を差し伸べてくれる

でも、その笑顔の裏には威圧的な瞳が宿っている

僕を完全に警戒し、軽蔑し、見下すような目だ

これからは過負荷として、いつもこんな目に耐えないといけないのか…

「『…うん、いいよ』 『でもさあ、僕、少し探し物をしているんだ』」

『よかったら君も一緒に探してください』」

そう言って路地裏の奥に手招きする

友好的な笑顔を作って、できる限りフレンドリーに言う

「…分かった。見付かったら直ぐ着いてきてもらいますよ？」

それに応じると、少年は僕が居る路地裏の奥に来てくれる

そして、少年が目の前まで迫った時…

「がアッ!!??」

少年の腹に数本の巨大な螺子が刺さり、
更に両腕にも小さな螺子が幾つも突き刺され、
壁に縫い付けられていた

「『あは!』『迂闊だねえ学生くん、過負荷^{マイナス}相手に
無計画に近づくんて』『でも安心して、僕は殺したりはしないか
ら』」

「てめえ…!」

何本も螺子が突き刺さっているのにも関わらず、少年は僕を睨み倒
している

「『良いのかなあ』そんな態度をとって?』『君の命はもう僕の手
の平の中っていうのに』」

すると、今度はさっきより数倍大きい螺子を取り出して、少年の頭
に近付ける

その行動に睨んでいた少年は涙目になる

「お願いだ! 命だけは助けてくれ!」

「『そんなテンプレ的な誤り方をされてもなあ…』『もう少しオ
リジナリティのある
謝り方をしてくれないと、僕も助ける気が失せるなあ…』」

「頼む！ なんでもするから！」

慈悲を悲願してくる少年

そんな少年を、僕はただただ笑いながら見ている

なんだろう、この感じ？

他人の悲痛の表情を見ると、不思議と満足した気分になる…

人を不幸にすることで、僕は満足できる

そうだ…そうなんだよ

過負荷はいつも迫害される、ならどうすれば
他人に平等に接してもらえる？

他人を自分と同じ位置に堕とせばいいんだ

「『ホント？』『なんでもしてくれるの？』」

そう訊くと、少年はブンブンと頷いた

「『うーん、どうしよう？』『他人に命令できる機会なんて滅多に無いからなあ…』」

『あ、そうだ！』『うん、なにを頼むか分かったよ！』

『死んでくれない？』」

そう言って、僕はその螺子を少年の眉間に
ぶっ刺した

絶望の表情に染まった少年はそのまま、氣力を無くしたかのように
喚くのをやめ、目を閉じた

「『：なーんちゃって！』『よく漫画でこういう台詞があったか
ら、僕も

一辺言ってみたかったんだあ！』」

そう言うと、僕は一つずつ少年の螺子を抜き取る

全部抜き終わると、僕は意識の無い少年に向かってこう言った

「『だいじょーぶ、君のその傷は』『全て無かつたことにしてあげ
たから』」

返り血塗れになった顔で僕は、満面の笑顔でそう言った

~~~~~

風紀委員第177支部は、大騒ぎしていた

先ほど見回りに向かった同僚の一人が、

路地裏で気を失っていたのだから当然とも言えるが

一部の者は同僚を襲った犯人の行方を追い、

その他一部の者は精神錯乱状態に陥っていた

同僚を、静めようと沸騰している

まるで臨死体験から抜け出した恐怖のような

錯乱状態に陥っており、その惨状は凄まじかった

「一体誰がこんなことを…」

錯乱する同僚を見てそう呟くのは、

第117支部所属の初春飾利

圧倒的なコンピューター技術を持っており、

そのハッキング技術は風紀委員でも重宝されている

あまりにも様子のおかしい同僚を他所に、

初春は気分を変えようと路地裏から出た

そこで目に飛び込んできたのは、路地裏の出口の直ぐ後ろ、

つまり自分の真横に居る少年

その少年の顔を見て初春は戦慄していた

少年の顔は、まさに返り血塗れだった

「『ん？』『あ、やべ！』」

初春を見るや否や、その少年は逃げるように走り出した

「あ！ 待ってください！」

慌てて初春はその後を追いかける

普段は身体能力が低く、逃げる犯人を捕まえることなど到底できない初春だが、なぜかこの少年にはどんどん追いついていった

そして、ようやくその少年の肩を掴んで捕まえた

「『ハアツ：ハアツ：ハアツ：』『やっぱ人類最低の僕が  
他人から走って逃げ切るなんて無理があつたかあ：』」

声を発した途端、初春はかつてにない気持ちに襲われた

ただ声を発しただけ

それだけで、この少年に対して説明しようのない憎しみを抱いた

「この人は気持ち悪い」と心の中で思いながらも、その少年に声を掛けた

「あの、貴方は誰ですか？ どうして逃げるんですか？」

「『だって、僕って証明書とか学生書とかまったく無いんだよ』  
『見たところ君達って警察みたいな連中だろ？』 『それなら捕まりたくないから逃げるのが普通だろ？』」

予想外のことを発した

証明書などが無い場合

つまりそれは不法にこの学園都市に侵入したという意味

学園都市の周りには巨大な壁が張り巡らされていて、  
進入する方法などは殆どなかった

「『あ、やべ』 『僕としたことが、返り血を拭いていないじゃないか』  
『あはは、いけないいけない』 『服は洗ったつもりなんだけどなあ』」

自分の顔の惨状に気付き、乾いた笑い声を出しながら、  
少年は自分の顔を袖で拭いていた

あまりに堂々と証拠を隠滅しようとする少年に、初春はただ呆れるばかりだった

「あの、一緒に着いてきてもらえませんか？」

「『嫌だ』 『だって今日、ジャンプの発売日じゃん？』  
『僕はこの日のために一週間を生き抜くんだよ』」

「そ、そんなのは後にしてくださいよ!」

馬鹿馬鹿しい理由に怒鳴るが、  
それでも少年は笑みを崩さない

「貴方の名前は？」

「『球磨川雪』 最近ここに来た高校生さ」

「では球磨川さん、一緒に着いてきてください。  
証明書や不法侵入の件では、そちらで訊きますので」

言われるがままに連行される球磨川

元々過負荷の所為なのか、身体能力が  
女子中学生のはずの初春より低いため、  
抵抗せず素直に着いていた

いやいや、ミスったぜ

興味本位での学生くんを放置した場所に行ったけど、



まさか警官で溢れ返っていたなんて

しかも、あの学生くんもまさか警官の一人だったとは…

ついてないぜ

今回は他の警官も多いから、僕は素直に連行された

本当は螺子伏せた後で逃走したいんだけどなあ

「『君も警官なのか？』」

「いえ、私は風紀委員という組織に所属しています。まあ、所謂学生で構成されている警察です」

「『へえ。ちなみにあの倒れていた学生くんも…』」

「風紀委員のメンバーです」

あはは、やっぱそうか

結局こうなってしまうのか…

「ではさっそく、貴方について話してもらえますか？」

風紀委員第177支部って所の一室に連れて行かれた僕は、そのまま事情聴取という名の尋問を受けた

「『さっきも言ったけど僕は球磨川雪』『ついさっきここに来たばかりの

高校生さ』『よろしく!』」

「私は初春飾利といいます。さっそくですが球磨川さん、貴方はどうやってここに来たんですか？」

初めて自己紹介してくれた初春ちゃん

うーん、見るからに年下の女の子に尋問されるのは少し嫌だけど、しょうがないねこは

「『知らない』『気が付いたらあの路地裏に倒れていたんだ』」

「どうやってここに来たか知らないんですか？（記憶喪失?）」

まあ、神様に送り込まれたなんて言えないし

「『うん』『だから僕はここが何処なのか、ここでの文化や常識はなんなのか、さっぱり分からないんだよ』

『説明してくれれば僕は助かるんだけど…』」

「そうですか：此処は”学園都市”と呼ばれている科学の街です。ここでは科学的に解明された超能力を研究していて、ここに住んでいる殆どの人間は学生です」

おいおい、まるで少年漫画のような世界じゃないか

それに、学園都市か：どこかで聞いたことがありそうなんだよねえ…

僕はジャンプ愛読者だから他ではあまり覚えが無いけど

「『へえ、それはまた僕の少年心を撥るような場所だね』」

「でも、本来ここは正式な手続きをしないと入れないんですけど…」

まあ、僕はあの赤髪さんに落とされてきたからね

正式な手続きなんて一切働いていない

「『そういうのは何処でやるのかな？』『悪いけど、そうと分かれば僕は

一刻も早く手続きを済ませてさっさと平和に戻りたいんだけどなあ』

」

その方が面倒なことにはならなさそうだしね

新しい世界に來た初日で不法侵入者で指名手配されたらそれこそ  
過負荷以上マイナスに最低だよ

「あ、でも…（この人って一応不法侵入者だよな？）」

「『まあまあ、そういう堅いこと言わないでよ』『そういう人は  
友達が減るぜ？』」

「よ、余計なお世話ですよ！」

僕なりの忠告のつもりだったんだけどなあ

「手続きはここで済ませてください。（記憶喪失なら良い、かな？）」

「そう言って、なにか住所を紙に書くと、僕に渡してくれた

「『ん』『ありがとう』」

うん、じゃあさっそく

「『じゃあ、さようなら』」

この部屋から出ようとする

「あ、待ってください！ まだ話は終わっていませんよ！」

でも直ぐに扉の前までダッシュされ、出口を塞がれる

あはは、幾ら過負荷とはいえ、女子中学生に  
出口を塞がれて出れないなんて、滑稽な話だぜ

本来ならここで彼女を螺子伏せてでも突破するけど、  
今日の僕は気分が良いんだ。ここは見逃してあげよう

「『ええ…』『僕は早く週間少年ジャンプを買に行きたいんだけど』」

「手続きを済ませるって言いませんでしたっけ!？」

あ、それもついでにやっておくよ

「はあ…もういいです。貴方は悪気があった

わけでも無いと思いますし、もう帰っても良いです」

あは、とうとうそっちが折れたね

面倒臭かったけど、まあこれで不法侵入者で  
無くなるのなら、それで良いけどね

「『うん、ありがとう』『じゃあね』」

そう言って僕は扉に手を掛ける

あ、そういえば彼女に言っておかないといけないね

「『君、忘れてると思うから言っておくね?』」

「え、なんですか?」

「『君の同僚を螺子伏せたのって、僕だぜ?』」

そう言った途端に、彼女は動きを止めた

啞然と戦慄した表情のまま僕を見つめている

その惨状に、僕は笑みを浮かべながら背を向ける

「『んじゃ』 『また明日とか!』」

一話 『んじゃ』 『また明日とか!』 (後書き)

駄・目・文

大事なことなので前書きと後書きで合わせて二回書きます

主人公を原作に組み込ませるのがここまで難しいとは思いませんでした

それに、初っ端から思いつき暴れちゃっていますし

それでも基礎の身体能力は殆ど球磨川本人と変わりません。

却本作りも加わった所為で、その身体能力は女子中学生をも下回っています(笑)

はあ、もっと文才が欲しい…

二話 『僕は被害者だ』 (前書き)

今回は少し短いです



## 二話 『僕は被害者だ』

風紀委員の支部から離れて数時間が経っていた

今は適当に学園都市を散歩しているんだけど、  
その暇な時間で僕は考えたんだよ

この世界は少なからずとも元の世界とはかなり違う

超能力なんて技術があるんだ、幾ら”科学の街”って  
言われていてもこれはかなり非科学的だ

でも、そこで僕はあることを思いついたんだ

僕はもしかしたら、一人じゃないと思う

この世界は少なくとも僕の世界とは違う。  
超常的なことは起こりえるし、非科学的なこともある

それなら、つまり、僕以外の他の過負荷も存在するかもしれないんだ

幾ら世界は違っててもこの世界のくだらなさは変わらない

理不尽さも何も変わらない

そんな腐った世界なら、僕以外にも過負荷として  
生まれてきている人が居るのかもしれない

だから僕はもう、この世界でやることは決まった

僕は、この学園都市に住む過負荷を全員纏め上げてみせる

そして、超能力者のエリート共に思い知らせてやろうぜ

マイナス  
人類最低の素晴らしさというものを

―数分後―

どうしよっかなあ

幾つものビルが並び、大勢の人で賑わっており、  
ショッピングモールや飲食店なども多数並んでいる  
場所を、僕は一人で歩いている

数多くの建物から発せられている電気などの光の  
所為で、夜とは思えないほど明るく、活発だった

そんな賑やかな道を僕は歩いているんだけど…

金、無いよ

元々僕は这个世界に來た時はなにもなかった

携帯は勿論、お金やパスポート、証明書なんて皆無だ

服装は神様がこの学生の街でも違和感が無いよう、学ランになっていた。赤髪さんなりの優しさかな？

はあ、これじゃあ週間少年ジャンプすら買えないじゃないか

何気に周りを見てみると、僕は面白いものを見つけた

大勢の不良っぽい高校生が、恐らくは中学生の一人の女の子を囲んでいる

どこから見てもカツアゲか、ナンパだね

今時そんなことする連中が居るなんて、ちよつと時代遅れとは思わないのかな？

…あ

あはは、いいことを思いついたよ

ここが漫画の世界だったら、多分”ニヤ”って効果音が出たと思うよ

「『やっほー！』『皆さん、こんばんは！』」

お気楽的に、友好的に不良たちに挨拶した

突然声を掛けられたのに驚いているけど、あの女の子を含めて全員の視線が僕に移る

「あア？ 誰だてめえ？」

「『ただの通りすがりの高校生さ』 『それより、僕』  
『君達に訊きたいことがあるんだけど、言っていいかな？』」

一人の不良が僕を脅すかの様に睨んでくる

それにも特に同様することなく、

僕は話を続ける

「『女子中学生をナンパするってことは  
つまりさあ、君達全員ロリコンって意味？ (笑)』」

僕の発言に周りの空気が凍ったかのように静かになった

不良たちは微動だにせず、僕を見つめている

やがて、硬直が段々と解けていき、その表情は怒りに染まっていく

「てめえ！　ふざけるんじゃないよ！」

全員が僕に殴りかかってくる

あまりのそれなりに大人数だけど、特に問題は無いね

「あ、危ない！」

さっきまでずっと突っ立っていた女の子が  
心配したような声を上げる

あはは、まあ見るからに貧弱そうな草食系の僕が  
ガラの悪そうな不良に大勢で襲われたらそう思うよね

次の瞬間、不良たちの全員が一人残らず、  
幾つもの巨大な螺子で地面に螺子伏せられていた

「なッ！？　グ、ぎゃああ！！！」

体中が螺子で貫かれている惨状を見て、  
不良の男の子たちは全員痛みで声を上げる

「『あは！』『馬鹿だねえ』『人の危険度を測らず攻撃してくる  
のは  
とても浅はかなことだぜ？』『それに、君達から攻撃してきたんだ  
から  
正当防衛ってことになれるしね』」

ついでに僕は全員のポケットから財布を抜き取った

「『じゃあ、あばよ』」

そして、用済みになった地面に平伏している男の子たち  
全員の後頭部に、巨大な螺子が突き刺さった

「「ぎゃああああ!!」「」」

一声を上げた後、辺りはシーンと静かになった  
完全に計画通りじゃないか

過負荷だから自分の思い通りには行かないとは思ったけど、まさかこんなにスムーズに進むなんてね

服は返り血塗れになっちゃったけど、まあ  
これは大嘘憑きで直せるけど

お金も手に入ったし、一件落着（?）

「『って、ワオ』」

某風紀委員長みたいな声を上げると、  
僕の顔面の前をギリギリ雷撃が通り過ぎた

雷撃が向かってきた箇所を見ると、僕に  
向かって手を突き刺しているさっきの女の子が立っていた

「アンタ…!」

敵意丸出しで僕を睨んでくる

それより雷撃ってなんだよ？

まるっきり漫画みたいな能力じゃないか

これが超能力なんだね

これは凄い、僕の少年心をここまで擦るなんて

「『おいおい、なにをそんなに睨んでいるんだい？』」

「幾ら私が脅されてたとしても、これはやり過ぎよ！」

地面で血塗れになりながら体中を螺子で串刺しにされている不良たちを指差す

なんでこうなるんだよ…

「『あの人たちが攻撃してきた』『故に正当防衛さ』」

「自分から挑発しといて、何処が正当防衛よ！ お金だってあいつらから盗んでるし！」

はあ、せっかく気分が良いからついでに助けてあげたのに、この仕打ちはなんだよ？

やっぱり過負荷に対しては理不尽だなあ

「『でも、事実あの子たちは僕に向かって攻撃してきただろ？』」

『貴方は僕に黙って殴られてボコボコにされろと言っても言っているのか?』」

「別に、私はそんなつもりで…」

「『僕は大量の高校生たちに袋叩きにされる所だったんだぜ?』  
『それなのに僕を凶悪犯扱いするなんて、横暴だよ君は』」

『僕は被害者だ』」

「ツッ!」

声にもならない怒りの声を上げる中学生ちゃん

それは僕が行った行為に対しての怒りなのか、  
僕に論破されたからの怒りなのかは定かでは無いけど

「ふ、ざけるなア!」

再び電撃をぶっ放してくる中学生ちゃん

いきなりスイッチの入った全力の攻撃で、  
しかも僕を殺す気満々だ

過負荷の貧弱体質である僕にこんな攻撃は避けれるはずも無く…



「『う、うわァァ!!!』」

僕は思いつきりその電撃を喰らい、  
真っ黒焦げにされた上に血塗れになってしまった

あはは、やばい、マジで死んじゃうよ

「えッ!？」

避けると思っていたのか、驚いている中学生ちゃん

「『あはは、過負荷相手に手加減無しって、えげつ無いぜ…』」

痛みと傷、そして出血多量で倒れてしまう僕

「あ、ちょっと!」

でも…

「なッ!？」

中学生ちゃんの頭上から大量の螺子が  
降り注ぎ、当たるか当たらないかのぐらいの  
距離で周りに突き刺さる

「『ふう、危うく痛みで気を失っちゃう所だったよ』」

『流石に無意識での使用は出来ないし』」

無傷で僕が立ち上がるのを見て、中学生ちゃんは目を見開いた

「そんな！？」（幾ら手加減していても、レベル5の電撃を直撃して無傷なんて…それにこいつからあふれ出てる負のオーラ…）」

「『はあ、これじゃあ僕が益々被害者じゃないか』『ま、その方が警察にも言い訳できるし、良いか』」

「アンタ、何者？ どうして私の電撃を受けて無傷なのよ？」

「『そんなの簡単さ』『君が頑張って僕に放った電撃を』『君が自分の労力を使って僕を丸焦げにしたっていう事実を』『無かったことにしただけさ』」

「は？（無かったこと？ わけ分らないわよ！）」

僕の無能力マイナスの意味が理解できていないようだね

まあ、君みたいな能力者プラスが僕みたいな無能力者マイナスを理解するなんて絶対にありえないけど

すると、後ろからパトカーのサイレンが鳴り響いている

どうやら僕が不良たちを螺子伏せているのを見て誰かが通報したみたいだ

「『あは！』『僕もう行かなくちゃいけないよ』『じゃあまたね、中学生ちゃん』」

お別れの挨拶をした後、啞然としている中学生ちゃんを他所に僕は歩き出した

「アンタは、絶対私が捕まえる！ 捕まえて、半殺しにしてあげるから、覚悟しろ！」

歩き出す僕に向かってそう怒声を放つ

あはは、実に強者プラスのような台詞だね

でも、なんで僕ばかり恨まれるんだろう？

あはは！ 憎まれマイナスっ子だから仕方無いよね！

## PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能<sup>たんのう</sup>してください。

---

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。  
<http://ncode.syosetu.com/n1468y/>

---

とある転生者の過負荷（マイナス）

2011年11月4日15時14分発行